

玄武塾 上級

漢方治療については理解したので、日本東洋医学会専門医を目指す方に漢方医学について診療の実際について症例検討を通して診断から治療までわかりやすくご説明します。
中級講座では簡略化した項や触れられなかった項目が新たに加わっています。

はじめに ～東洋医学的診療の実際～症例による提示	
東洋医学的診断	
病態の把握：証を決定するための情報収集	診療の実際に沿って
	四診
	- 問診
	- 望診(舌、五臓の関連) - 聞診(聴診、嗅診) - 切診:脈診(六部定位)、腹診(背臥位、座位、立位)
診察によって得られる情報を分析する	東洋医学における病理観-正常状態からの偏倚
	- 陰陽論：八綱弁証:闕病反応の量的、質的、空間的評価-急性疾患に有用
	- 気血水：生体の恒常性を保つどの要素に異常があるのか
	- 五行論：五臓六腑:病変の首座はどこに、臓腑間の相関関係；相生・相克理論
	- 経絡論：気血の巡行障害の発生点=経穴を探る
	治療につながる東洋医学的病因の探求
	- 内因、外因、不内外因
病機=病気の成立機転を臓腑と気血水分類から評価 どの臓腑(機能的システム)に気血水のいかなる異常があるのか	
方証相対と弁証論治	
証 ～西洋医学的病名との関連：病名治療をより適切なものに	
治療の進め方-理・法・方・薬	
治療の原則	根本治療(本治)、対症療法(標治)
	先表後裏、先急後緩、先補後瀉
	急性疾患に扶正祛邪、慢性疾患に陰陽調節
	治療を受ける個人差を考慮する
治療八法(汗、(吐)、下、和、温、清、消、補)	急性疾患に発汗、瀉下法、慢性疾患に和、温、補法
方剤選択の実際	作用別分類方剤群から証に従い選択する
	臓腑病機に対応する方剤群から証に従い選択する
	方剤 ～ベクトル論的座標を用いた作用別方剤群の利用
	複合する病態への対応：合方、併用
	個人差による処方量の量的、質的加減
困った時の口訣	
重要処方の解説	お役立ち20処方(基本10処方除く)
漢方薬の副作用：腸間膜静脈硬化症	
漢方とEBM ～科学と漢方	
上級編鍼灸講座	
経絡学と経穴学	
理法方穴術(中医鍼灸的発想)	
診断即治療(日本鍼灸的発想)	

※この他、毎回養生についての講義を行う予定です。

※カリキュラムは暫定のものとなります。変更となる場合がございますので、ご了承ください。